

第三十八回國際アルタイ學會

宮脇淳子

一九九五年八月七日(月)から十二日(土)まで、常設國際アルタイ學會(Permanent International Altaistic Conference、通稱ピアックPIACC)の第三十八回會議が、岡田英弘東京外國語大學名譽教授を會長(President)として、三菱信託銀行川崎研修所(神奈川県川崎市川崎區藤崎三丁目六番一號)で開催された。この學會は、一九五八年に西ドイツで創立されて以来、毎年夏に主として歐米で開催されてきた。日本で開催されたのは今回が初めてである。筆者は、國際アルタイ學會にはこれで計十回参加したことになり、また、今回の第三十八回會議の開催にあたっては、岡田會長と二人だけで日本事務局を運営した。岡田會長が、『東洋學報』第十七卷第三・四號誌上に、第三十八回國際アルタイ學會の全日程と、そこで報告された四十一本の研究發表すべての原文題名を日本語譯を付けて掲載するので、本稿と併せて参照されたい。ここでは、岡田會長の公式報告には載らなかった、國際アルタイ學會日本招聘の顛末を、事務局長の立場から經理内容も含めて御報告申し上げる。

本學會の名稱であるアルタイ學とは、中央ユーラシアの歴史、言

第三十八回國際アルタイ學會(宮脇)③

語、文化の研究で、トルコ語、モンゴル語、トゥングース語などアルタイ山脈の東西に擴がる言語をアルタイ語族と總稱することから名づけられた。學會メンバーの専門分野は、古代中央アジア遊牧民に始まる、トルコ、モンゴル、滿洲・トゥングース族等の考古、歴史、言語、民俗や文學であるが、言語學に限って言えば、韓國語と日本語を専攻する學者もしばしば参加する。

アルタイ學者の研究対象である中央ユーラシアは、つい最近まで大部分が共產圏に属していた。第二次世界大戦後、ヨーロッパは東西に分断され、西ヨーロッパの學者たちは、かつてのような現地調査もままならなくなった。一九五七年、ソ聯でフルシチョフ黨第一書記が東西平和共存を呼びかけ、デタントが始まったその機運に乗じて、東西の緊張緩和に貢献するために、常設國際アルタイ學會(PIACC)が創立された。一九五八年に西ドイツのミュンヘンにおいて第一回會議が開かれ、初代の書記長(Secretary General)には、ボン大學のハイシッヒ Heisig 教授が選ばれた。それ以来三十七年に亘って毎年かかさず夏に開催されてきたPIACCは、つい最近まで、この分野では唯一の、東西の研究者が直接接觸できる場であった。

PIACC開催の目的は、世界各國の研究者が自由に参加し、情報

交換を行うことにある。毎年の會議で最も重要な行事は、参加者全員が出席を義務づけられている「コンフェッションズ (Confessions 告白)」で、この場では、誰もが出身國や年齢や地位にかかわらずなく平等に、自己紹介と最近の業績について報告できる。初期のPIAACでは、研究発表は行われず、コンフェッションズだけだったと聞いた。今でも、PIAACに参加しても、研究発表だけを行い、コンフェッションズに缺席すると、PIAACメンバーとは見なされない。

現PIAAC書記長は、一九一六年生まれの、アメリカ・インディアナ大學のサイナー・Singer、名譽教授で、ハイシツヒ先生の跡を受けて書記長に選舉されてから、五年毎の改選のたびに再選されて、すでに長い間書記長を務めている。サイナー先生の専門分野は、トルコ語を初めとする諸言語や、古代からの遊牧民の歴史など中央ユーラシア全域に及ぶ。先生はハンガリー生まれで、ドイツとフランスで教育を受け、イギリス・ケンブリッジ大學で教鞭を執った後、インディアナ大學に招かれた。サイナー書記長は、つねに、PIAACが政治に利用されないよう、東にも西にも片寄らない純粹に學問的な會議となるよう、細心の注意を拂ってきた。筆者が参加した過去九回の會議に關して言えば、一九八六年、當時のソ聯邦タシュケントで開催された第二十九回會議のような例外はあったものの、ほとんどのPIAACは、たいした後援もなく、参加費を安くするため、全員が大學の學生寮や修道院に宿泊し、終日行動をとるにして歡談に明け暮れる、格式張らないなごやかな會議だった。

第三十八回會長となった岡田英弘が、PIAACを日本に招待する

し続けたが、日本から新たにPIAACに参加する學者は、残念ながら稀であった。實はすでに一九八六年に、タシュケントで開催された第二十九回會議の際、岡田はサイナー書記長に日本での開催を申し入れて大いに喜ばれたが、この時は様々な事情が重なって、開催を見送らざるを得なかった。

岡田は、一九九三年三月に二十七年間勤めた東京外國語大學を定年退官した。宿願であった國際アルタイ學會の日本招待にあたって、サイナー書記長と、何より岡田會長自身の氣に入るような運営を行うために、あえて學術團體の後援や公的資金の援助を求めないことにした。第三十八回國際アルタイ學會日本事務局は、私設研究室である岡田宮脇研究室に置き、學會開催準備は、會長と筆者二人だけで行うことになった。

日本で歐米流の参加費の安い國際會議を開催しようとする時、最初に問題になるのは、宿泊施設である。日本には修道院もなく、夏休みに學生のいなくなる學生寮もない。これについては、眞に運のよいことに、岡田が十五年以上も交遊を深めてきた親友、(株)國際關係基礎研究所の故新井俊三社長が、古巣の三菱信託銀行を説得し、同行が川崎市に建設した豪華な研修所を會場として利用できるように斡旋してくれた。新井氏は學會開催を待たず一九九四年十月に逝去したが、三菱信託銀行はその遺志を尊重し、最初は難色を示した部外者ことに外國人の研修所宿泊も、岡田と筆者が志立託爾會長を訪問した後、最終的には許可してくれた。

第三十八回國際アルタイ學會(官協) ③

にあたって、最も心を砕いたのが、歐米で毎年開催されている會議と同じような、傳統に則ったPIAACを日本でも開催できることを海外からの友人たちに示し、サイナー書記長を満足させたいということだった。

岡田英弘は、一九三一年生まれ、東大東洋史學科で和田清教授に師事し、在學中は朝鮮史を研究、卒業後滿洲語を學び、一九五七年に『滿文老檔』の研究で仲間とともに日本學士院賞を受賞した。その後、米國シアトル・ワシントン大學に留學して、亡命ロシア人のモンゴル學者ポツペ博士からモンゴル年代記を學び、次いで西ドイツのボン大學に留學し、PIAAC創立者の一人で初代書記長のハイシツヒ教授に師事した。岡田は、ボン大學留學中の一九六四年、オランダのピーテルスベルフで開かれた第七回PIAACに初めて参加した。一九六八年、岡田はポツペ博士の後任としてワシントン大學に赴任したが、三年後日本に歸國したため、ワシントン大學のモンゴル學講座は消滅した。

岡田はその後、PIAACからも歐米の學界からも遠ざかっていたが、一九八四年、西ドイツのヴァルパーベルク(ボン近郊)開催の第二十七回會議からPIAACに毎年参加し始め、このころから、PIAACの日本招待を念願とするようになった。サイナー書記長を初めとする歐米の學者たちも、PIAACの日本開催を待ち望んでいた。

一九八五年のイタリア・ヴェネツィア開催の第二十八回會議からは、筆者も岡田に連れられてPIAACに参加し、研究発表を行うようになった。岡田と筆者は、毎年のPIAAC参加報告を、日本アルタイ學會(通稱「野尻湖クリルタイ」)や『東洋學報』誌上で発表

は、前年の十二月に、アメリカ・インディアナ大學にある本部から、サイナー書記長と會議を主催する會長の連名で、世界中の會員に發送される。第一回回状は、開催場所と日程を通知するだけである。その後、本部のサイナー書記長に宛てて参加希望の返事を出した會員に、開催年の三月に再び本部から、参加費・宿泊場所・會場への道筋などを記した第二回回状が發送される。この後ようやく、開催地の事務局宛、参加者が各自、發表題目や到着時間などを通知してくる仕組みである。

PIAACメンバーのリストはインディアナ大學の本部にあるので、今回日本事務局は、第一回と第二回回状の原稿を作成して、本部のサイナー書記長に送っただけで、誰に發送したかは知らされなかった。PIAACに興味のある者は、本部に申し込めば、毎年の學會回状とニュースレターを郵送してもらえるが、三年続けて出缺の返事がない者は、名簿からはずされる。また、他人の推薦では通知はしない。サイナー書記長によると、そうした人からは返事が来たためがないからだという。

そういうわけで、日本事務局には、三月に第二回回状を受け取った海外のPIAACメンバーから、四月以降ようやく出席の返事が舞い込み始めた。FAXを利用した出席通知が多かったのは、さすがに時代の變化である。ロシア聯邦のモスクワやサンクトペテルブルクのみならず、トゥヴァやバシコルトスタンからもFAXが届いた時には感動したが、こちらからのFAXはしばしば届かず、たいへん苦勞した。

ロシアからの参加希望者のための日本のヴィザ取得が、會議準備の中で最もたいへんな作業だった。各人が日本事務局に参加申込み

をしてくると、まず在ロシア國日本大使館領事部に招聘保證書をFAXする(日本大使館へのFAXですら、しばしば送信エラーとなつた)。やがて東京に申請書類が届き、外務省領事移住部外國人課舊ソ聯擔當から、各人につき、身元保證書、入國理由書、滞在日程表、岡田會長の在職證明書または納税證明書、會議資料、滞在費支辨概要といった書類の、原本一部、寫し五部の提出を求めてくる。會議終了後、何日に何便で確かに出國しましたという歸國報告書の提出も義務づけられている。會議開催前の會長の時間は、ほとんどこれらの書類作りに費やされ、KDDと、FAXを送信できないロシア人への航空書留速達の出費もかなりな額になった。それでもついに、パシニコルトスタンのウファからの参加希望者二人は、ウィザ取得が間に合わず、日本の外務省に特別措置を依頼してくれと、モスクワからフランス語で國際電話がかかって泣きつかれたが、日本事務局としてはこれ以上なすすべはなかった。

それ以外は、岡田會長と筆者は過去十年以上毎年P I A Cに出席してきたので、ほとんどの参加希望者と友人關係にあり、意思の疎通には何の問題もなかった。ただ、一九九二年に臺北で開催された第三十五回會議の際に、主催者が航空運賃および参加費の補助をした前例があったので、今回も問い合わせがいくつもあつた。サイナー書記長自身からも、ロシアやハンガリーなど舊共產圏からの参加者に補助ができるかどうかの打診があつた。

岡田會長は、サイナー書記長には、ロシアは日本の隣國(Neighboring)であると返答し、ロシア聯邦のアルタイ共和國や、トルクメニスタンやトルコなどから来た問い合わせすべてに對して、今回の會議は個人主催であるから、航空運賃の補助は一切しないという

原則を貫いた。ただし、自力で日本に到着したロシア人九名、ハンガリー人二名、ブルガリア人一名の参加費は、全員が友人ということで、岡田會長が個人負擔した。P I A Cの會議を主催する會長は、前年の會長とP I A C書記長の旅費・滞在費だけは負擔する義務がある。今回、フランスのリシャール前會長が出席できなかったため、その分だけ経費が節約できた。

會議は、八月七日(月)午後一時から、會場の三菱信託銀行川崎研修所一階ロビーで登録(Registration)が始まった。海外からの参加者(Participants)もほぼ全員、第二回回状に添えた地圖付きの説明通り、自力で川崎驛に到着した。日本に住んでいる参加者には、前もって参加費(Registration fee)の郵便振替をお願いしていた。海外からの参加者は、この場で同伴者も一律、一人日本圓で四萬圓の参加費を納めて、名札と宿泊室の鍵を受け取った。同伴家族も入れて五十二名となった今回の會議参加者は、會長の要請通り、會期中、全員が研修所に宿泊した。

海外の學者で、出席の返事をおきながら直前になってキャンセルした者五名、出席の返事のまま現れなかった者が四名いたのは、事務局としては迷惑な話だったが、その代わり直前の出席申込み一名と、出席の返事をしないで現れた者が二名いたので、若干の埋め合わせはついた。

五十二名の参加者の内訳は次の通りである。日本人十四名、ロシア人十名(カルムイク共和国二名、トゥヴァ共和国二名を含む)、アメリカ人九名(モンゴル系三名を含む)、ドイツ人五名(ウズベ

ク系一名を含む)、ハンガリー人四名(フランス系一名を含む)、中

國人二名(ウイグル族一名、モンゴル族一名)、韓國人一名、オランダ人一名、ブルガリア人一名、フィンランド人一名、フランス人一名(ハンガリー系)、モンゴル人一名、イタリア人一名、ベルギー人一名。その内、研究発表者は四十一名(内、二名は共同発表)、発表はせず参加のみが五名、同伴家族が六名であつた。その他、故障のため参加を果たさず、論文のみ送付した者(臺灣人)が一名あつた。

到着日の八月七日の夕食の最中、受け入れ側の代表として、川崎研修所における研修プログラムの運営を擔當する三菱信託銀行の子會社(株)アップル・プランニングの關谷勉弘社長が歓迎の挨拶をした。夕食後は、一年ぶりあるいは数年ぶりに再會したメンバーが、地階のサロンで、ビールとウイスキーを酌み交わしつつ、夜が更けるまで歓談した。研修所では他の研修はほとんどなく、これが毎夜の恒例となつた。

八月八日(火)は、午前九時から一階大研修室において開會式(Opening ceremony)があり、岡田會長が日本開催の實現までの経緯を回顧した後、開會を宣した。續いて十時から、サイナー書記長の司會でコンフェッションズがあり、参加者一同、自己紹介と最近の業績を語つた。晝食後、午後一時半から、一階大研修室と二階中研修室で、「歴史と文化」「言語」の二部會に分かれて研究発表が始まった。八日午後の研究発表は、コーヒー・ブレイクをはじめで二部會合わせて四セッション、九日(水)午前にコーヒー・ブレイクをはじめで四セッション、午後二セッションが行われた。十日(木)は終日遠足日、十一日(金)の午前の總會(Business Meet-

ing)後、最後の研究発表セッションが行われた。

P I A Cの會議は、主題(Central theme)を決めても決めなくてもよい。(ちなみに、一九九六年六月十六日から二十一日までハンガリーのセグドで開催される第三十九回國際アルタイ學會では、Central themeを「内陸アジアとヨーロッパ間の歴史的言語的相互關係」としている。)最初に説明したように、アルタイ學は様々な學問分野の總稱であるから、第三十八回會議では、各研究者が自己の専門に關して自由な研究報告を行えるように、會長の意向によって、Central themeを設定しなかった。各セッションの司會(Chair)は前もって決まっておらず、當日の朝會長が頼んで歩いて、全員が快く引き受けるのも、P I A Cの慣習である。

プログラムの詳細は、前述の通り岡田會長が『東洋學報』誌上に発表するので、ここでは研究発表題目の日本語訳だけ紹介する。回状で、発表は一人二十分以内、會議における使用言語は英語・フランス語・ドイツ語のみと指定してあつたが、これは嚴格に守られた。発表と質疑應答はほとんど英語で行われ、ロシア語・モンゴル語しかできない参加者は、コンフェッションズの時などには友人に個人的に通譯してもらつた。

「歴史と文化」部會

サイナー Sinor, Denis 「容器の不思議」

ビルタラン Britalan, Agnes 「モンゴル國西部のトゥヴァ人巫女の一家―傳統と同化」

ハニー Honey, David 「史記」匈奴列傳の本文」

ケルナー Kellner-Heinkele, Barbara 「サントク・

ペテルブルクと草原の民―モスクワの公文書館に見る十八世紀の外
交信書」

小山皓一郎「オスマン人から見たティームール」

シザーク Meserve, Ruth I. 「誰から鞭まで―中央ユーラシアの

獣醫の外科用具」

トンゲルロー「Tongerloo, Alois van」古代ウイグル語マニ教

典・佛典に見る救世主と治療者」

ツィーメ Zieme, Peter 「『十王經』の古代トルコ語本」

・ホイコヴァ Boikova, Elena 「ピアセツキーの學問的・藝術的遺
産」

ボヴァーエフ Bovaez, Basan E. 「ロシアとカルムイクの歴史記
録に見るアヌカー・ノン」

フョートル Fedotov, Alexander 「巫としてのチンギス・ハ
ーン」

グチノヴァ Gutchinova, Elisa-Bair 「カルムイクのビジネス・

エリート―新しい生活のモデル」

池内功「元朝の宮廷祭祀」

ジャクチト Jagchid, Sechin 「内蒙古の亂の原因―清朝の蒙古政
策の變化に對抗して」

宮脇淳子「カザンで発見されたオイラト系圖」

岡田英弘「モンゴルと中國の傳國圖」

シヤールキョシ Särközi, Alice 「種―モンゴルのシヤマニズムに
おける象徴的價值」

志茂碩敏「モンゴル帝國の政治構造―遊牧國家史研究の再検討」

志茂智子「ラシード・ウッディーンの『モンゴル史』―その『集

譯

ツディマート・アル・アダブ』の言語の例」

デボア de Boer, Elisabeth 「エヴェンキ語の母音調和」

コレロヴァ Gorelova, Liliya 「滿洲語と他のトゥングース語との
比較―總合主義・分析主義の範例に則して」

ヤンフネン Janhunen, Juha 「モンゴル諸語とトゥングース諸語
は同系か」

清瀬義三郎「女直語と滿洲語における後部軟口蓋音」

フィーツェ Vietze, Hans Peter 「滿洲文字の電算化」

崔漢宇「アルタイ諸語の動物名」

ベラト Barat, Kahar 「漢字のトルコ語轉寫體系」

イェルマコヴァ Ermakova, Lyudmila M. 「古代日本語における
物の見方と名づけ方」

石塚晴通「日本語と韓國語における漢文訓讀法(その二)」

板橋義三「古代日本語の代名詞はアルタイ諸語の代名詞と同系
か」

この他、今回研究發表は行わなかったが、京都大學人文科學研究

所滞在中のメリア Mair, Victor, H. (敦煌學)、大阪外國語大學モ

ンゴル語科滞在中のブレブジヤン Purevjav (言語學)、ヘルリン

自由大學教授フォンメンデ von Mende, Erling (滿洲學)も會議
に参加した。

今回の會議は二部會に分かれていたので、筆者は「言語」部會を

聴講することができなかった。會期中の事務局は、研究發表が行わ

れている二階中研修室の向かいに置き、筆者と山口瑞鳳東京大學名

譽教授門下の同級である吉水千鶴子氏(ウィーン大學博士・成田山

第三十八回國際アルタイ學會(宮脇)③

史」との関係

白岩一彦「十三・十四世紀のモンゴル・中國・ペルシアにおける

チンギス家王朝のオトグ・ボゴルたち」

パン Pang, Tatiana A. 「一八九九年のクロトコフのシベ佛寺訪
問」

スターリ Stary, Giovanni 「康熙帝が祖母に宛てた滿文書簡につ
いての豫報」

斯欽孟和「北京木版本『ゲセル・ハーン』とノムチ・ハトン本
『ゲセル・ハーン』の年代」

吳淑恵「チベット内亂の後、雍正六年、清軍はいかにしてチベッ
トに進入したか(代讀)」

「言語」部會

ニンシヤン Solntsev, Vadim M. /ニンシヤウ Solntseva,
Nina 「日本語とオーストロネシア諸語・オーストロアジア諸語と
の関係―アルタイ語族問題の一環として」

アルバーフ Alpatov, Vladimir M. 「トルコ諸語のアルファベ
ット選擇の問題―歴史と現在」

アナイン Anyan, Zoya V. 「トヴァウにおける民族言語の現
況」

ハザイ Hazai, György 「古代アナトリア・トルコ語の諸問題」

種口康一「牛角授記經』の蒙文本」

ロズキー Rozyci, William 「モンゴル語 kiryasun (馬の毛)
と滿洲語 inggaha (鳥の綿毛)」

齋藤純男「西方中期モンゴル語における強勢と母音弱化」『ムカ

佛敎研究所助手』に手傳ってもらったが、筆者自身も外國人の世話

やスケジュール調整でやはり忙しく、「歴史と文化」部會のすべて

を聴講することもできなかった。「言語」部會参加者の話では、今

回の會議は研究發表の水準が高く、特にアルタイ諸語の比較・系統

に關する發表では、討論が盛り上がり、コーヒー・ブレイクの時

間まで費やすくらいだったという。

當初、日本事務局は、費用と人手の両面において、會議紀要(Pro-

ceedings)を刊行する餘裕はないと考えていた。しかし、發表の

内容がよいという右のような理由で、會期中に紀要の刊行について

海外からの参加者の間で話し合いがもたれ、岡田會長に申し入れが

あった。その結果、第三十八回PIAAC紀要は、岡田會長を編者

(Editor)とし、實際にはスターリ・ヴェネツィア大學教授が編集

をして、アエタス・マンジュリカ Aetas Manjrica 誌の特別號と

して、ドイツのオットー・ハラソヴィッツ Otto Harrassowitz 書

店から一九九六年中に刊行されることに決まった。

専門外の言語學やトルコ學の發表をコメントする能力は筆者には

ないが、筆者にとってPIAACとは、世界中の學者と直接知り合

い、中央ユーラシア草原を西から見る視點を與えてくれた教育の場

だった。今回筆者が發表したオイラト系圖は、實は、カザン大學に

調査に行ったPIAACメンバーが見つけて知らせてくれたもので、

筆者には齒がたたない十八世紀のロシア語も、他のPIAACメンバ

ーが解讀を助けてくれた。最初に述べたように、PIAAC開催の目

的は、世界各國の研究者が自由に参加し情報交換を行うことにある。

今回の筆者の報告は、ヨーロッパから参加した學者に、これこ

そPIAACの成果だと言ってもらった。

七

さて、會期中の他の行事についても報告しておく。八月九日(水)午後六時から、研修所の食堂で、岡田會長主催の懇親會(Reception)が催され、學會に寄付をした日本側の來賓と、さまざまな国籍のアルタイ學者が懇談した。懇親會の直前午後四時から、研修所二階の一室で、一九九七年七月にハンガリーのブダペストで開かれる豫定の、第三十五回國際アジア・北アフリカ研究會議(ICANAS)について、同會議會長のハザイ教授と東方學會の代表者との會談が行われた。東方學會からは、高崎直道理事長、柳瀬廣事務局長、松井透教授、福田秀一教授の御四方に研修所までお越し頂き、PIAAC参加中の石塚晴通教授も加わった。これはハザイ會長が、ハンガリー出身のサイナーPIAAC書記長も同席の上で會見したいと、前もって東方學會事務局にFAXで申し入れて来たからで、柳瀬事務局長から連絡を受けて、日本事務局がプログラムに組み込んだのである。高崎理事長、柳瀬事務局長、松井教授の御三方は會議に續いて懇親會にも出席、福井文雅教授も参加された。

この懇親會開催の事情について、ここで説明をしておきたい。

今回の第三十八回會議の四萬圓という参加費は、五泊六日の宿泊費・食費と、遠足の費用すべてを含んでいる。これは、前年フランス・シャンティイの修道院で、四泊五日で開催された、第三十七回會議の参加費とほぼ同額である。ヨーロッパで開催される會議であれば、貧乏な學生でも列車を乗り継いで参加することができるが、東アジアの日本で開催されるとなれば、欧米に住むPIAACの常連メンバーが自費で参加するのはたいへんな負擔である。しかも、當時一ドル八十圓代という、想像を絶する圓高だった。四萬圓という設定は、ぎりぎりの選擇である。しかし、四萬圓の参加費では、た

とえ三菱信託銀行川崎研修所を費費で使用させてもらえらるとしても、酒代も出ない。そこで、會期中の一夕、参加者との懇親會を設けて、日本事務局から友人に寄付を呼びかけた。

懇親會の参加費は一人一萬圓であったが、思いがけず、趣旨に賛同してくれた篤志家四十八名(團體)から、百萬圓近く寄付金が集まった。そのうち三十餘名が來所し、五十二名の會議参加者との懇談を楽しんだ。會議参加者のうち二十一名が女性で、色とりどりの装いを競い合い、たいへん華やかなパーティになった。外國人はみな大食漢だと思ひ込んだ研修所の調理スタッフが山のような御馳走を用意し、岡田の友人たちがポランティアを買って出て、ワインの栓を抜いて歩いた。餘興に大道藝「蝦蟇の油賣り」を披露してくれた源吾朗氏は日本モンゴル文化協會理事の一人で、琴を演奏してくれた中丸春美氏も同協會の關係者である。

會議の日本側参加者にも、前もって事務局の内情を説明したところ、何人もが参加費に加えて寄付を振り込んでくれた。おかげで會期中毎夜、スキヤキやてんぷらやふんだんな酒を提供できた。

八月十日(木)は遠足(Excursion)で、朝九時に、二臺の貸し切りバスで箱根へ向けて出發した。前日に事務局から、日本語に堪能な外國人参加者四名に通譯のボランティアを頼んであった。一臺目のバスは、ロジスキーとデボアがバスガイドの説明を英語に通譯し、もう一臺のバスは、ヤンフネンとイェルマコヴァがロシア語に通譯した。あいにくのもやで富士山は見えなかったが、芦ノ湖を遊覽し、關所跡を見學、湘南海岸を見ながら横濱中華街に到着し、夕食は中華料理の大宴会となった。

八月十一日(金)は、午前九時から總會があった。岡田會長が、

今年度のインディアナ大學アルタイ學賞、いわゆるPIAC Gold Medalが、フランスのジャン・リチャール Jean Richard に授與されることを發表し、續いて過去三回以上出席の會員の投票によって、岡田英弘、バーバラ・ケルナー、ハイナゲレ、ジョヴァンニ・スターリの三人が來年度の同賞選考委員に選出された。晝食後は全くの自由時間となり、参加者一同、それぞれ日本側の参加者の案内で、川崎大師や東京や横濱へ散って行った。

十一日午後五時半から最後の行事として閉會式(Closing Ceremony)があり、岡田會長が一同の協力を謝して閉會を宣した。この日の夕食後は、残った酒類を酌み交わし、名残りを惜しんだ。

八月十二日(土)朝食後、事務局の用意したワゴン車で、参加者を川崎驛まで順番に送り、午前十一時に、二階の小研修室に設置してあった事務局を片付けて、最後のグループが研修所を出發した。

今回の國際アルタイ學會に参加した日本人は、同伴者も含めてみな、自分が主人側の立場にあることを自覺し、人手の少ない事務局を助けて、初來日の海外からのPIAACメンバーの接待に努めてくれた。おかげで、ロシア人からは夢のような毎日だったと禮を言われ、他のメンバーも口々に、理想的なPIAACだったと感想を述べた。會期中、志茂夫妻が撮ってくれた九百枚に上る寫真を見ると、参加者全員が終始楽しそうである。PIAACらしい會議を開催するという會長の宿願は實ったと思う。

サイナー書記長が今回特に言及したことに、初めて日本で國際アルタイ學會が開催されるその年に、世界的に有名な日本のアルタイ學者、服部四郎と村山七郎の二人の逝去を追悼することになったの

は、何という偶然であろうということがあった。服部四郎先生は、一九八三年にPIAAC・ゴールド・メダルを授與されている。村山七郎先生は、日本人としてはポッペ博士の最初の弟子で、最後の弟子だった岡田英弘をたいへん親しく思っていた。二人のアルタイ學者は、奇しくも同年の一九〇八年生まれで、同じ一九九五年に亡くなった。サイナー先生に頼まれて、PIAACニュースレターNo. 88に岡田會長が書いた二人の先達の追悼記事は、第三十八回會議に間に合って印刷され、参加者全員に配られた。

日本のPIAACメンバーの一人で、ぜひ御参加頂きたかった池上二良先生は、東京方面が酷暑であったことと體調に自信がないというところで、不参加になった。佐口透先生にも、同様の理由で御参加頂けなかった。藤枝晃先生は、ハザイ教授からぜひ會いたいという手紙が届き、参加を熱望されたが、やはり體調をくずすと他の参加者に迷惑だからと、出席を断念された。會期中、藤枝先生から石塚晴通教授宛にあれこれ傳言の指示が入り、娘婿の石塚教授が「僕はメッセージジャー・ボーイ扱いです」とこぼしておられた。

第三十八回國際アルタイ學會は、會長と筆者二人だけの事務局だったので、かえって外國からの連絡に機敏に對應でき、會期中は研修所のスタッフや友人たちに助けられ、参加者全員の協力を得て、すべての行事が実にスムーズに運営された。プログラムの作成、遠足の手配、酒と菓子準備等すべて二人で行ったので、必要経費も豫想をはるかに下回った。これなら毎年でも開催できるというのが、會議直後の岡田會長の感想だったが、その後、風邪を引いて三ヶ月間仕事にならなかつたところを見ると、國際學會の主催は樂なことではない。

東方學 第九十二輯 拔刷

平成八年七月三十一日 發行

發行所 財團法人 東方學會

東京都千代田區西神田二丁目一